國學院大學学術情報リポジトリ

宮地直一コレクションと『大祓詞註釈大成』：企画展「文献にみる祓の世界」の報告

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 大東, 敬明
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001959

宮地直一コレクションと『大祓詞註釈大成』

―企画展「文献にみる祓の世界」の報告―

大東敬明

要旨

大祓詞・中臣祓は、神道史上において重要な位置を占めるものであり、古代から近世に至るまで、それらをめぐって、様々な儀礼や解釈が行われた。

大祓詞・中臣祓の諸本及び註釈を集成した『大祓詞註釈大成』（以下、『註釈大成』）は、金光教内において要職をつとめた佐藤範雄の喜寿を記念して編纂されたものであり、宮地直一、河野省三、山本信哉が編纂に関与し、解題を執筆している。このうち編纂の中心となったのは、山本であろうと推察される。これは、山本の所蔵本が底本として多く用いられていること、解題の多くを執筆していることによる。佐藤と山本は広島国文学会において三上一彦に学び、寝食を共にした関係にあり、ともに井上頼囮の門人である。三上は六人部是香の門下であり、是香が著し、三上が自ら書写した『大祓詞天津菅麻』を佐藤に形見として与えている。これを出版することが『註釈大成』の編纂・出版と深く関わっていた。また、『註釈大成』の底本には、無窮会所蔵の井上頼囮旧蔵本が多く用いられていることには佐藤と山本が井上頼囮の門人であったことが大きく関係しよう。佐藤と宮地については、佐太神社、吉備津神社の昇格に際して佐藤が関与し、その考証に宮地が加わっていることなどから『註釈大成』編纂以前からの交流が認められる。『註釈大成』の編纂・出版に際しては佐藤範雄先生喜寿記念刊行助成会が設立され、その発起人には金光教に関わる人々が名を列ねている。昭和八（一九三三）年には委員会が開かれ、『註釈大成』を三巻とし、逐次刊行することが決められた。

現在、整理・分析が進められている國學院大學の宮地直一コレクションには、『註釈大成』編纂に際して、底本とされたと思われる資料が所蔵される。これらのうちには猪熊信男、鈴鹿太郎、神宮文庫が所蔵していたものの影写本があり、影写された時期が『註釈大成』編纂時期と重なるものが含まれる点が注目される。

キーワード

『大祓詞註釈大成』、宮地直一、山本信哉、佐藤範雄、中臣祓

はじめに

國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンターでは、文部科学省オープンリサーチセンター事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」を進めている。このうち、「國學院の学術資産に見るモノと心」グループでは、皇典講究所が出版した刊行物や本学所蔵資料に基づき、「国学」の学問的手法を用いて、本学における「伝統文化」研究・発信の実態と、近代以降の「モノ」と「心」に関わる人文学の展開を明らかにする研究を進めている。このうちの一つに國學院大學に所蔵される宮地直一が収集した資料（宮地直一コレクション）の整理・分析がある。[1] 同コレクションは、原稿類・蔵書（和装本・洋装本）・写真・天神人形などからなるが、現在は和装本の整理・目録化及び分析を進めている。

周知のように、宮地直一は、神祇史（神道史）[2] を確立した人物であり、その学問は神祇に関わる事柄を通史的に理解することを中心にすえている。そ

れを象徴するように、整理・分析中の和装本は神祇及び神道、諸神社に関連する史資料をはじめ、仏教儀礼書、漢籍にも及ぶ。今後、これらの資料について、宮地の学問における位置、日本宗教史・神道史・神社史・思想史など関連する諸科学における位置、原所蔵者の蔵書傾向や分類など、様々な角度より分析してゆくことが必要となろう。

この整理・分析の成果の一部として平成二十年五月十二日より七月二十六日にかけて、伝統文化リサーチセンター資料館でおこなわれた企画展「祭祀遺跡・神社祭礼・國學院の学術資産」では「文献にみる祓の世界」と題して展示（以下、「展示」）を行った。[3] これは、本学に関わった宮地直一・河野省三・山本信哉が、佐藤範雄の喜寿を記念して編纂・刊行した『大祓詞註釈大成』（以下、『註釈大成』）や祓の研究に注目し、彼らがどのような資料を集めたのか、日本人は祓をどのように行い、考えたかという点について、具体的なモノを展示することによって紹介するものであった。

本稿では、まず宮地直一コレクションに含まれる大祓詞・中臣祓に関する資料を理解する助けとする為に、まず大祓詞・中臣祓について概説する。そして、『註釈大成』の編纂過程について、これまでに明らかにしえたことを述べ、最後に『註釈大成』に編纂に関わる資料について述べる。なお、「展示」においては、宮地直一コレクションと河野博士記念室所蔵資料より、展示品を選出したが、紙幅の都合上、本稿では宮地直一コレクションについてのみ述べる。

一　神道における大祓詞・中臣祓

まず、「展示」の際の解説パネルより、神道に於ける大祓詞・中臣祓の位置について記した部分を示す。[4]

祓・大祓とは何か

祓は、心身についた罪や穢れを除去するために行われる儀礼である。祓の際にとなえられる大祓詞や中臣祓は、神道においては『日本書紀』などの古典とならんで重視された。そのため、古代から現代に至るまでさまざまな儀礼や解釈が行われ、目的や用い方に応じて多様な本文がつくられた。

大祓詞は、六月・十二月の晦日に行われた大祓の際にとなえられた祝詞で、平安時代中期に編纂された『延喜式』に収録されている。その内容は、人々が犯したさまざまな罪は「天津祝詞の太祝詞事」をとなえたならば、風が雲や霧を吹き払うように清められ、川や海にまします神々が罪を海まで運び、根の国・底の国に放ち、そこで罪は消えるというものである。大祓は国家的な祭祀として定期的には六月・十二月の晦日に行われたほか、大嘗祭の前や災害・疫病が起こったときなどには臨時に行われた。現在でも、六月・十二月には全国の神社で、茅の輪をたててくぐり、形代に罪穢れを託して祓うなどの形で大祓（夏越の祓・年越の祓）が行われている。

中臣祓の展開と大祓詞への復古

中臣祓は、大祓詞をもとにして十世紀には成立していたとされる。その名称は、大祓の際に大祓詞を読み上げた中臣氏の名に由来する。平安時代後期には、個人的な祈祷を行っていた陰陽師が中臣祓を受容していたことが確認されている。陰陽師の影響で、僧侶も中臣祓を伴う儀礼を行うようになり、平安時代末期には僧侶による注釈書『中臣祓訓解』も著された。鎌倉時代初頭までには、それら影響によって伊勢の神宮の神職の間で独自の祓の作法が形成され、鎌倉時代後期頃から、祓は秘伝・口伝化された。[5] 室町時代中期に吉田兼倶が体系化した吉田神道では、中臣祓が重視され、祓に「秡」の字を用いて特別な意味を持たせるなどし

て独自性を主張し、特色ある儀礼や注釈・研究を行った。[9] その作法は、吉田神道の広まりとともに流布していった。近世になると、中臣祓の注釈書の出版がさかんに行われた。それには、神職・神道家らが儒教の知識を利用しつつ著したものが多く含まれている。江戸時代中期以降、国学者らは神道の復古をとなえ、祓は本来、中臣祓ではなく大祓詞であるべきだと考えた。この立場からの研究がさかんに進められ、多くの注釈書の書名にも大祓詞の名称が用いられた。

『註釈大成』「跋文」において、佐藤範雄は大祓詞について「永く我が国民思想の発達を助け、神道経典中の重要なる位置を占むることは、何人も疑を容れざる所なり。」[『註釈大成』下、「跋文」、佐藤、一頁]としており、佐藤範雄の喜寿の記念に大祓詞・中臣祓の註釈を集めたものが企画されたのも、神祇・神道に関わる文献のうちで、これらが重要な位置を占めることを、編纂や刊行に関わった人々が認識していた為であろうと推定される。

二 『大祓詞註釈大成』の編纂過程

『註釈大成』及び、その編纂過程について、「展示」の解説パネルにおいては、

『大祓詞註釈大成』(全三巻)は、金光教の佐藤範雄の喜寿を記念して、大祓詞・中臣祓の本文および注釈を集成したものである。本書は、國學院大學の研究・教育に密接に関わっていた宮地直一・河野省三・山本信哉の三人が編集を行い、昭和十(一九三五)年から同十六(一九四一)年にかけて内外書籍より刊行された(下巻・一九三五年、中巻・一九三八年、上巻・一九四一年)。内容としては、第一類として十六種の大祓詞・中臣祓の諸本を収め、第二類として六十五種の注釈書を両部神道・伊勢神道・卜部神道・吉川神道・垂加神道・復古神道・独立派に分類して収めている。この本文・注釈書の底本や対校本には、編者が収集した資料が用いられた。これらのうち、宮地・河野の収集した資料は、現在、宮地直一コレクション・河野博士記念室所蔵文庫の一部として本学に所蔵され、研究に利用されている。『大祓詞註釈大成』は、大祓・中臣祓の基本的資料を集録したものとして今日でも高く評価され、宮地・河野・山本が執筆した解題は、大祓詞・中臣祓研究の基礎となっている。

とした。『註釈大成』の価値について岡田荘司は、

本書は刊行いらい約半世紀近くを経た今日においても、その史料的価値はほとんど変っていないことはいうまでもなく、三博士(宮地、河野、山本・・・引用者注)による解題も、中臣祓の基礎研究として光彩を放ちつづけているといっても過言ではない。

[岡田荘司、一九八一、一頁]

と、高く評価しており、現在に至ってもその価値は少しも失われていない。また、『註釈大成』によって祓をめぐる神道思想や儀礼の変遷が通覧できる点においては、神道史及び神道思想史研究の上で極めて重要であると思われる。

本稿では、佐藤範雄『信仰回顧六十五年』上・下(以下、『信仰回顧』)[『信仰回顧』上・下]及び、現在、遠藤潤「宮地直一」に付された年譜(「宮地直一年譜」)[遠藤潤、一九九六]をもとに増補改訂作業を進めている宮地直一の年譜(作業用)に多くの部分を依拠しつつ、『註釈大成』の編纂過程について概観する。

(1) 佐藤範雄と山本信哉

佐藤範雄は金光大神の直弟子として、金光教の布教合法化及び独立教派となるために活動し、金光教内の要職を歴任した人物である。以下、佐藤と山本信哉及び宮地直一との関係について述べる。

『註釈大成』の編纂において、山本が重要な役割を果たしたことは、山本の所蔵する文献が底本として多く用いられ、また解題を多く山本が執筆していることからうかがう事ができる。さらに現在整理中の河野博士記念室所蔵の河野省三のノート及び書簡のうちには、山本より河野に対して『大祓詞塩之八百合』の借用を求める書簡（昭和十一〈一九三六〉年四月七日付）が確認されている。同書は『註釈大成』に収録された『大祓詞塩之八百合』の底本として用いられ、河野省三が解題を執筆した。

佐藤と山本の出会いは、山本が『國學院大學金光教青年会々報』創刊号[7]に記したものによれば、明治二十二（一八八九）年である。明治二十四（一八九一）年には佐藤と山本はともに広島国文学会において三上一彦に学び、「神道広島分局の隣山谷といふ老婆の家」［『信仰回顧』上、二五三頁］で寝食を共にしている。三上は六人部是香の門人で、文久元（一八一六）年から翌年にかけて、六人部是香の著した『大祓詞天津菅麻』（以下、『天津菅麻』）を書写している。佐藤は是香に私淑して是香の著作である『私祭要集』を愛読しており、三上より生前に形見を譲られる際に、三上が書写した『天津菅麻』と是香が賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤を詠んだ和歌の軸を所望して譲られている［『註釈大成』中、『天津菅麻』、山本、一四～一五頁、『天津菅麻』、七四二頁］。この『天津菅麻』は『註釈大成』に収められた同書の底本となっている。『天津菅麻』の解題において山本は「事稍々他岐に渉るの嫌あれども、金光教内有志及び我等同人が、特に佐藤氏の喜寿祝賀の記念事業として大祓詞註釈大成を撰定し、直ちに同氏の快諾を得るに至れる動機も、亦実に此の天津菅麻出版の事に起因するのであるから」［『註釈大成』中『「天津菅麻」、山本、一五頁］としており、『註釈大成』が編纂・出版されるきっかけには佐藤範雄が所持していた『天津菅麻』の出版があったことがわかる。

明治二八（一八九五）年七月に、佐藤は井上頼圀に入門し、大正三（一九一四）年に井上が歿した際には、棺側御供役をつとめている［『信仰回顧』上、三一九頁。『信仰回顧』下、一二頁］。山本も井上の門人であり、『註釈大成』の「復古神道」「独立派」の底本に無窮会所蔵の井上頼圀旧蔵本が多く用いられているのはこのような背景があるためであると推測される。

（2）佐藤範雄と宮地直一

佐藤と宮地については、佐藤と山本ほど親密ではないようで、『信仰回顧』には、大正五（一九一六）年六月二十八日に日本橋倶楽部で幻燈『憲政自治の精神附敬神崇祖の表現』を試映した際に招待者の一人としてみえ［『信仰回顧』下、四三頁］、大正十四（一九二五）年十月二日に佐藤は宮地を訪ねている［『信仰回顧』下、二〇六頁］。また昭和三（一九二八）年の佐太神社、吉備津神社の昇格に際して佐藤が関与し、その考証には宮地が加わっている［『信仰回顧』下、二四六～二四七頁］。

『註釈大成』刊行の事情については、『註釈大成』下の「跋文」にふれられており、次節でふれる佐藤範雄先生喜寿記念刊行助成会（以下、助成会）について「抑も本会は、初め宮地博士の発議に係り、山本・河野両博士の賛襄を得、」［『註釈大成』下、「跋文」、佐藤、二頁］とあることから、『註釈大成』の企画そのものは、宮地の発案であったと考えられる。ただし、先述の『天津菅麻』の出版計画と宮地の発案が、どのように関わるのかは明らかではない。

（3）佐藤範雄先生喜寿記念刊行助成会設立より『大祓詞註釈大成』刊行事業終了まで

次に助成会の成立から、刊行事業終了までについてまとめる。

昭和七（一九三二）年十一月一日、助成会が設立され、「佐藤範雄先生喜寿記念刊行助成会趣意書」が出されている。趣意書には

年来の偉勲を讃仰し、この記念すべき年を祝賀せんと欲し、年初聊か案を具して先生の内意を伺ひしに、先生の仰せらるゝに

「従来屢々一身の為に大方より寄せられたる深甚の好意に対して、日夜

何を以て酬ひんかと凝思せる所、今茲七七(ママ)の齢を重ぬるに当り、願はくは相知れる各位の慶福を祈念する事に専念せんと欲するのみ。一身の祝賀の如きは毫も念頭に無し。されど、かねて親交ある宮地、山本、河野の三博士、亦、予が喜寿記念の為にとて、『大祓詞註釈大成』の編纂刊行を企てられつゝあり。博士等と相謀りて、そを助成せしめられなば、独り予の本懐のみには非ず云々」と。依りて三博士の計画せられつゝありと云ふを聞くに、大祓詞につき古来各種の註釈あるものを、年代を追ひ流派を別ちて編輯解説し、『大祓詞註釈大成』と題し、先生喜寿の記念として刊行せんとするものにして、(以下略)

[『信仰回顧』下、三〇九～三一〇頁]

とあり、

之が完成の上は学界に裨益する所多大なるは勿論、邦家斯道の宝典として永く珍重せらるべきは、蓋し疑を容れざる所なり。こゝに於てか不肖等相謀り、左記要項の下普く教内各位の賛同を仰ぎてこの挙を達成し、以て先生の寿を祝する所あらむと欲す。希くは同感の人士奮って賛同せられむ事を。

昭和七年十一月一日

[『信仰回顧』下、三一〇頁]

と結ばれ、発起人二十二名の名が列ねられている。[8] この発起人は金光教に関わる人物である。ここから先述の宮地の企画した『註釈大成』編纂刊行の計画と、金光教内において佐藤範雄の喜寿を祝う計画がはじめは別にあった。これが佐藤の意向により、一つにまとめられ、金光教内の人々に呼びかけられて助成会が設立されたと想像することができる。佐藤は先に挙げた通り「跋文」において助成会は宮地の発議によるものとしているが、助成会の成立に際して、宮地がどのように関与したのかは明らかではない。

なお、助成会については「佐藤範雄先生喜寿記念刊行助成会要項」に、

佐藤範雄先生喜寿記念刊行助成会要項

一　本会ヲ佐藤範雄先生喜寿記念刊行助成会ト称ス

一　本会ハ佐藤範雄先生ノ喜寿記念トシテ編纂セラルベキ『大祓詞註釈大成』ノ刊行ヲ助成セシメ、刊行ノ上ハ先生ノ意思ニ従ヒソノ名ヲ以テ適宜寄贈スルモノトス

一　本会ノ主旨ニ賛同セラルゝ向ハ、右二項ノ資ヲ昭和七年十一月末日マデニ本会事務所ニ寄贈セラルゝモノトス

一　寄贈金ハ一口金一円トス、但、同一人ニテ幾口寄贈セラルゝモ随意ノコト

一　寄贈金額ニシテ、右第二項ニ要スル経費ヲ超エタル時ハ、更ニ佐藤範雄先生ニ関係アルモニシテ発起人ニ於テ適当ト認ムル事業ニ使用スルモノトス

一　本会ノ事務所ハ広島県深草郡御野村金光教芸備教会内ニ置ク

一　教内ニテ『大祓詞註釈大成』購入希望ノ向ハ、本会ニ於テ実費頒布ノ便ヲ計ルベク、詳細ハ追テ発表スベシ（実費一部凡金五円以上六円五十銭以下ノ見込）

以上

[『信仰回顧』下、三一一～三一二頁]

とあって、事務局は佐藤が初代教会長であった金光教芸備教会に置かれた事など、会の概要をうかがう事ができる。

昭和八（一九三三）年二月八日、東京上野の雨月荘において、『大祓詞註釈大成』委員会が行なわれた。そこには宮地、山本、河野の他、畑一、和泉乙三、長谷川雄次郎、高橋正雄、西村傳蔵、佐藤幹二が出席している。宮地、

山本、河野の他は、助成会の発起人に名を列ねている人々である。この会において、『註釈大成』を三巻とし、逐次刊行することを議決している［『信仰回顧』下、三一七頁］。

『註釈大成』は、まず下巻が昭和十（一九三五）年十二月に刊行された（奥付には、十七日に印刷、二十二日に発行とある）。同月十八日に宮地は東京の金光教本部出張所に滞在していた佐藤範雄と面会しているが［『信仰回顧』下、三五三頁］、面会内容については明らかではない。しかし、時期から考えて、『註釈大成』下巻に関わることも含まれていたであろうとの想像は、許されるであろう。

翌年一月、佐藤範雄は宮内省に赴き、『註釈大成』下を昭和天皇へ献上し、また同書を伊勢の神宮をはじめ、全国の官国幣社へ奉納している。この献上と奉納は、中、上巻が刊行された際にも行われている。

中巻は昭和十三（一九三八）年五月に刊行され、同年七月五日には、雨月荘において、山本、河野、田邊勝哉、畑一とともに、『註釈大成』の刊行について懇談が行われている［『信仰回顧』下、四一四頁］。田邊勝哉は、國學院本科を卒業後、井上頼圀の門人となり、宮内省図書寮編修官をつとめた人物である。

昭和十四（一九三九）年十月二十五日には、佐藤が宮地の自宅を訪ね、『註釈大成』の刊行について相談をしている［『信仰回顧』下、五二八頁］。そして、昭和十六（一九四一）年六月に『註釈大成』上巻が刊行され、『註釈大成』の刊行事業は終了する。

後に述べるが、宮地直一コレクションに所蔵される中臣祓資料のうちには、昭和八年から十四年の間に書写されたものも含まれており、おそらくはこの編纂事業に関わるものと想像される。

小括

『大祓詞註釈大成』は、佐藤範雄の喜寿を記念して編纂されたものであり、編纂には宮地直一、山本信哉、河野省三が関与し、解題を執筆している。このうち、中心となったのは、山本の所蔵本が多く底本として用いられていることや多く解題を執筆していることから、山本であろうと推察される。佐藤と山本は広島国文学会において三上一彦に学び、寝食を共にした関係であり、ともに井上頼圀の門人でもある。三上は六人部是香の門下であり、是香が著し、三上が自らが書写した『天津菅麻』を佐藤に形見として与えている。この出版が『註釈大成』の編纂・出版と大きく関わっていた。また、『註釈大成』の底本には、無窮会所蔵の井上頼圀旧蔵本が多く用いられており、これは佐藤と山本が井上頼圀の門人であったことが大きく関係しよう。

佐藤と宮地についても、佐太神社、吉備津神社の昇格に際して佐藤が関与し、その考証を宮地が行っていることなどから『註釈大成』編纂以前からの交流が認められる。

『註釈大成』の編纂・出版に際しては佐藤範雄先生喜寿記念刊行助成会が設立され、佐藤はその発案を宮地が行ったとする。この助成会は、昭和七年に組織され、その発起人には金光教に関わる人々が名を列ねている。翌年には委員会が開かれ、『註釈大成』を三巻とし、逐次刊行することが決められた。

本稿においては、筆者の準備不足から、佐藤範雄の伝記研究や金光教史上において『註釈大成』がどのような意味を持つのか、発起人の教団内での位置づけや佐藤との関わり、助成会の実態など論じられていない。また、国学の近代的展開とも関わる人物についても同様である。これらの問題については、いずれ考察してみたい。

補論・延喜式撰上一千年記念講演会について

宮地、河野、山本と大祓詞・中臣祓について考える際に注目されるのが、大正十五（一九二六）年十一月三日に皇典講究所と全国神職会の共催で、國學院大學において行われた延喜式撰上一千年記念講演会である。同会では、記念講演会と資料展覧会が行なわれている。

記念講演会は、午後三時から五時まで

一、開会の辞　芳賀矢一
一、延喜式について　和田英松
一、神名式の研究　佐伯有義
一、延喜式と神社制度　宮地直一
一、延喜式の祝詞に就いて　上田萬年
一、閉会の辞　桑原芳樹

［『皇国』、六二頁］

の次第で行われ、上田萬年を除く講演内容が『皇国』三一九号に掲載されている。なお、宮地の講演は、『國學院雑誌』三三巻三号にも掲載されている。

資料展覧会は午前十時から午後五時まで行われ、この準備には田邊勝哉、山本信哉、澤田章、植木直一郎、河野省三、岩橋小彌太らがあたっている［『皇国』、六〇頁］。「延喜式撰上一千年記念展覧会陳列目録」をみると、延喜式関連資料が二八〇点展示されており、このうち大祓詞・中臣祓に関連すると思われる資料が一〇〇点以上展示されている［『國學院雑誌』、五〇～七四頁、『皇国』、三五～五九頁］。これには河野省三が出品したものが多くみられる。現段階において延喜式撰上一千年記念講演会と『註釈大成』との直接的な関係は保留としたいが、宮地、山本、河野が関与し、大祓詞・中臣祓に関わる資料が多数陳列されている点は、『註釈大成』が編纂されるまでの一過程として注目されてよいかと思われる。

三　宮地直一コレクションにみえる中臣祓関連資料

現在、整理・分析中の宮地直一コレクションには、受け入れ時に付された仮番号によれば、二九三〇点の和装本が所蔵され、このうち、大祓詞・中臣祓に関わる資料は八〇点ほど確認されている。

『註釈大成』に宮地所蔵本が底本として用いられたと記されているのは『中臣祓　清世本』、『中臣祓　氏経相伝本』、『中臣祓　雅業王伝授本』、『中臣祓　平仮名本』、『中臣祓　仮名付本』、『大宮司聞書』、『皇天記』、『中臣祓注』、『中臣祓解』[9]である。このうち、現在『中臣祓　清世本』、『中臣祓　雅業王傳授本』、『中臣祓　平仮名本』、『中臣祓　仮名付本』、『大宮司聞書』の底本と思われるものが確認されている。このほか『諸祓集』の対校本として用いられ、宮地が執筆した解題でもふれている『祓本』も確認されている。これらはすべて、伊勢流あるいは吉田流の祓に関わるものであり、宮地が解題を執筆したものも同様である。また、時代としては中世以前のものが多い。

「宮地直一博士主要著書・論文一覧」［國學院大學神道史学会、一九八〇］を参照すると、宮地は中臣祓についてまとまったものを著してはいないが、複製本（『中臣祓注抄』〈神宮司廳、一九三三〉、『三国最上之祓』〈明治書院、一九三四〉、『中臣祓』〈明治書院、一九三八〉）や『大祓詞註釈大成』、岩波文庫『中臣祓講義』に付した解題・解説がある。これらのうち、『三国最上之祓』に付された『三国最上之祓の研究』［宮地直一、一九三四］は宮地の中臣祓及び吉田神道研究のなかで唯一、まとまったものであるといえる。以下、個別資料について述べる。

（1）『中臣祓　清世本』・『秡本』

『中臣祓　清世本』には、神宮祭主の間で伝授された祓の詞や作法、各種の真言等の秘伝が記されている。

『中臣祓　清世本』の底本は『中臣祓』（受入仮・一一八九①　以下、『中臣祓　清世本』）であり、宮地は同書を荒木田家に伝来したものとする［『註釈大成』上、『中臣祓　清世本』、宮地、六頁］。また、同書は『祓本』（受入仮・一一八九②）及び岡田米夫からの書簡と同じ帙に収められている。

『中臣祓　清世本』については、宮地自身が解題において［『註釈大成』上、『中臣祓　清世本』、宮地、五～六頁］詳しくふれている。また、『註釈大成』編纂に関わると思われる朱書き等は見受けられない。

岡田米夫よりの書簡は、年代は明らかではないが、『中臣祓　清世本』を借りた際の礼状である。これには、同書が神宮祭主の間に伝来したものであって興味深いこと、両部及び伊勢神道の資料として貴重であることなどが記されている。

『祓本』は、『註釈大成』において『諸祓集』の対校本として用いられたものである。『註釈大成』に収録された『諸祓集』は、底本として松木時彦所蔵本を用いている。このことは本文に次いで

右諸祓集【一名尚重解除鈔】一冊、神宮禰宜松木時彦氏所蔵本也。以文学博士宮地直一氏所蔵「祓本」及神宮禰宜御巫清白氏所蔵「尚重解除諸鈔抜萃」令校合畢。／昭和八年十一月三日　毅堂　山本信哉

［『諸祓集』、一四八頁］

と記されていることからわかる。松木時彦所蔵本はこのほかに『元長修祓記』や、後述する『中臣祓　賢圓本』が『註釈大成』の底本として用いられている。松木時彦は、神宮に奉仕した後、『宇治山田市史』などの編纂に関わった人物であり、昭和九（一九三四）年一月十三日に歿している。さらに、『諸祓集』の校合は、『註釈大成』下巻が出版される以前に終了していたことは、『註釈大成』の編纂過程を考える上で注目される。

『祓本』について『註釈大成』「諸祓集」の解題には「奥書に示す諸本の中、架蔵本はもと荒木田家に蔵せられたもので「祓本」と題し、朱書の手入あり、時代は古くないが書写頗る忠実で、比較的よく原書の俤を傳へてゐるやうに思はるゝ。」［『註釈大成』上、『諸祓集』、宮地、二九頁］とし、『祓本』には、

神宮文庫本尚重解除鈔一巻ニ当ル、但シ小異アルモ本書ヲ以テ原本ノ面目ニ近キモノトスベク文庫本ハ後世ノ転写トナス
尚重ハ明応頃ノ人ナリ権禰宜タリ其事本書中ニ見エタリ

と朱書きされている。宮地の解題にあるように、『祓本』には、多くの校異を示す朱書や張紙がある。

（2）『中臣祓　雅業王伝授本』

本書は、「展示」の段階では確認されていなかったために、展示していない。『中臣祓　雅業王伝授本』は、実用に用いられたもので、白川家の神祇伯である雅業王より、子の源兼親に伝授されたものである。

『中臣祓　雅業王伝授本』の底本は『中臣祓住抄　享徳本大中臣祓　御祓本長本私記　伯家本中臣祓　六根清浄大祓　守晨御祓本　六種合本』（受入仮・四九二、以下『祓本　六種合本』）に含まれている『伯家本中臣祓』（猪熊信男所蔵本の影写本）である。『祓本　六種合本』は、後述する『大宮司聞書　元長記　御祓修法式　内外宮本式祓覚書　外宮神宮流祓勤仕次第聞書　五種合本』（受入仮・四九一、以下、『祓本　五種合本』）と対になるものである。この二冊は、『祓本　五種合本』の見返しに[10]

年来謄写しおける祓本を合冊して五種と六種との二冊となす／この外吉田家関係本あり大型本あり、五種六種の二冊ハ主に／神宮文庫の蔵本なり。昭和十六年十一月七日表箋を改めたる次／之を記す

と朱書きされており、合本した事情等がわかる。なお、ここに「この外吉田家関係本あり」とあるのは宮地直一コレクション所蔵の『中臣祓深秘　中臣祓　三種太祓　六根清浄太祓』（受入仮・一四二七）を指すと思われる。『伯家本中臣祓』には、『註釈大成』にも翻刻されている通り、「右京都猪

熊信男氏蔵本　昭和五年四月謄写一校了」［『中臣祓　雅業王伝授本』、四四頁］とみえ『註釈大成』の編纂が始まる以前に書写したものである。

『伯家本中臣祓』には影写に対して、紙の継ぎ目の位置や同筆か別筆かなど細かな注が朱で付されている。例えば、『中臣祓　雅業王伝授本』の冒頭には「天之御柱　国津御柱（中略）祈念　拍手」［『中臣祓　雅業王伝授本』、四一頁］とあるが、これに対して『註釈大成』には「（以上見返シニアリ、別紙別筆ナリ）」と注が付されている。これは、『伯家本中臣祓』にも「（以上見返シニアリ別紙別筆也）」と朱書されていて、注が一致する。反対に、『中臣祓　雅業王傳授本』の末尾に翻刻された別紙の「神道三種加持」［『中臣祓　雅業王伝授本』、四三～四四頁］をみると、『伯家本中臣祓』には「神道三種加持」に対して「【以下本文ノ奥、裏端書ハ、別筆也　以下四行ハ従四位下云々ノ裏ニ当ル】」、「明三元三行三妙加持」に対して「以下三行ハ耳乎振立云々ノ裏」、「秡吐普加身依身多女寒」に対して「遺礼留云々ノ裏ニ当ル」と朱書きがある。しかしこれらは『註釈大成』には採られていない。

次に『祓本　六種合本』の他の収録本の書写時期や原本所蔵者についてふれておく。

『中臣祓住抄』（以下、『中臣祓注抄』）には「昭和八年一月八日以神宮文庫本影対校了」とある。『中臣祓注抄』の複製本が宮地の解説を付して出版されるのも同年で、それに付された『中臣祓注解説』には「昭和八年九月十五日　神宮文庫の需に応じ　文学博士宮地直一記」［宮地直一、一九三三］とみえる。『註釈大成』に収録された『中臣祓注抄』は、この複製本を底本としている。

また、宮地直一コレクションに所蔵される複製本の見本（『中臣祓注抄』受入仮・一二一九）には

本書ハ神宮文庫蔵、神宮司廳蔵書及林崎文庫朱印を押す、
昭和八年十月末日七條氏の手によつて複製出来、用紙ハ中田氏の尽力により、伊野に於ける同氏工場に調製、本書ハ見本として七條氏の差出せるものなり、
同年十一月一日記之

とある。このことから、『祓本　六種合本』に収録された影写本は、複製本入手以前に影写されたものであることがわかる。なお、七條氏とは七條憲三のことで複製本『中臣祓注抄』の印刷者である。

享徳本『大中臣祓』（神宮文庫・第一門九二八四号。[1] 以下『大中臣祓』）は、神宮文庫所蔵本を底本としており、昭和十三年十二月に書写されている。『大中臣祓』は、享徳三（一五三〇）年に賢圓より東常縁に伝授されたもので、神宮古典籍影印叢刊・三『神宮儀式　中臣祓』に影印が『大中臣祓』として収録されている。『註釈大成』には『大中臣祓』を吉田流の祓等の影響によって様々な変更を加えつつ転写した松木時彦所蔵の『中臣祓　賢圓本』、（昭和七年十月二十三日に時彦が書写［『中臣祓　賢圓本』、二四頁］）が用いられている。

宮地は『中臣祓　賢圓本』の解題［『註釈大成』上、『中臣祓　賢圓本』、宮地、六～七頁］において、「伊勢田丸在の某家」が所蔵していた「大中臣祓」と題する巻子本が徴古館の所蔵となったので、「文庫」において実見したとし、これを『中臣祓　賢圓本』の原本であるとする。この宮地の実見した本は、外題、形態、奥書の一致などから『大中臣祓』であったと想像される。[12] そして、これを実見したのが印刷後であったので、それは用いずに松木時彦所蔵の『中臣祓　賢圓本』のまま収録したものとする。『大中臣祓』を宮地がいつ確認したのか明らかにしえていないが、この時期の確定は、『註釈大成』に収録された諸書がいつごろ校訂されたのか、という問題にも関連しよう。この点について、神宮古典籍影印叢刊・三『神宮儀式　中臣祓』の影印によると『大中臣祓』が神宮文庫に受け入れられたのは、昭和十三年三月三十一日［『神宮儀式　中臣祓』、二八二頁］であること、『中臣祓　賢圓本』

と所蔵者が同じ『諸祓集』の校合が昭和八年に終了していることから、昭和十三年ごろに宮地は『大中臣祓』を実見し、『大中臣祓　賢圓本』の校訂はそれ以前に、終了していたものと筆者は考えている。

『御秡本　長本秘記』には「右御祓本長本秘記一冊原本者久邇宮家御秘蔵也」「昭和十年九月十八日校合畢　神宮権禰宜　胡麻鶴醇之識」とみえる。胡麻鶴醇之は、昭和六（一九三一）年に東京帝国大学文学部国史学科を出て神宮司廳臨時大神宮史編集部編集嘱託となった人物である。

『六根清浄大祓』には、書写年月日及び原本所有者は記されていない。

『守晨御祓本』には「右御祓本原本者久邇宮家御秘蔵也」「昭和十年九月十日校合畢　神宮権禰宜　胡麻鶴醇之識」とみえ、『御秡本　長本秘記』と同月に同一人物によって書写されたことがわかる。

（3）『中臣祓　平仮名本』『中臣祓　仮名付本』

両書は、底本となった写本の書写日や親本所蔵者が同じであるため、まとめて述べる。

『中臣祓　平仮名本』は平仮名交じりで記された中臣祓で、本文を計十三段に別ける点、「あやまりをおかしけんくさ〳〵のつみ事とかたゝり」［『中臣祓　仮名付本』、五一頁］とみえる点に吉田流の特徴を示す。『中臣祓　仮名付本』は全文に振り仮名が付されており、本文を計十三段に別ける点など『中臣祓　平仮名本』と同じ特徴がみえ、吉田流の中臣祓である。

『中臣祓　平仮名本』の底本は『平仮名本　中臣祓』（受入仮・一二七〇）で、『中臣祓　仮名付本』の底本は、『訓点付　中臣祓』（受入仮・一二七八）であり、ともに鈴鹿太郎所蔵本の影写本である。『平仮名本中臣祓』の見返しには、書誌が記され、その後に「按、本書ハ実用に供せられしものなるべし、全体に亘りつかれあり、」とある。宮地は、解題においても同書が平仮名交じりで書かれていることを挙げた上で「是れ蓋し、懐中用として読み易からしめんが為であらう。即ち読誦本の一である。」［『註釈大成』上、『中臣祓平仮名本』、宮地、十五頁］としている。

書写年代については、『平仮名本　中臣祓』の末尾に

昭和九年七月二十日一校了　［花押（直一）］
本文所々右ニ傍書アリ之ヲスリケシタルモノ、如ク見ユ、字形明カナラズ
昭和十四年一月四日再校　直一
右一冊鈴鹿太郎氏蔵本、粗影写了

と朱書きされ、『訓点付　中臣祓』にも同様に

昭和九年七月二十日一校了　［花押（直一）］
本文ハ振仮名ノミニテ音符ナシ
之ニ紛ラハシキハ虫喰ナリ
昭和十四年一月四日再校了
右一冊鈴鹿太郎氏蔵本粗影写了

と朱書きされている。西田長男によれば、宮地は第三高等学校（旧制）に在学している間、神祇道の家である吉田家の家老的な役割を勤めた鈴鹿家に下宿していたため、両書の親本の所蔵者である鈴鹿太郎とは兄弟のように仲がよく、また吉田家文庫に出入りができたという。なお、鈴鹿太郎は、京都市助役をつとめ、晩年は聖護院八ツ橋の本舗の社長として経営に当たった人物である［西田長男、一九七九、四～五頁］。宮地と鈴鹿太郎との交友については、宮地自身も『三国最上之祓の研究』において、

以上、述来つたところは、昨年（昭和八年・・・引用者）十月・十一月の両度、京都大学に神道史を講ぜんために出張の際、三十年に垂んとす

る久しい交誼を重来つた鈴鹿太郎氏の啻ならぬ好意により、邸内の文庫を開放して自由に調査を聴され、二百数十部に餘る神道関係の記録を閲覧した場合の手記を基としたものである。

［宮地直一、一九三四、四四頁］

と述べている。宮地は、この昭和八年の調査の際に、『三国最上之祓』を鈴鹿家文庫の中より見出し、複製本を昭和九年に「神書叢刊第一」として明治書院から『三国最上之祓の研究』を付して出版している。この複製本では表装に予算がかかりすぎる為、表装は写真で、裏書は翻刻されて『三国最上之祓の研究』[13]に示されているが、宮地直一コレクションには「家蔵本」として原本に忠実に複製されたとみられる『三国最上之祓』（受入仮・一二七四）が所蔵されており、「展示」の際に出品した。なお、『三国最上之祓』は神書叢刊において刊行されているという理由から、『註釈大成』には収録されていない［『註釈大成』上、『中臣祓平仮名本』、宮地、一五頁］。

『平仮名本　中臣祓』、『訓点付　中臣祓』の影写は昭和九年であるが、この昭和八年の調査の際には見出されていたようで、『三国最上之祓の研究』に示された鈴鹿家所蔵の中臣祓の目録には、「中臣祓　平仮名書　一冊／包紙ニ「兼右御筆」トアリ」「中臣祓　一冊／包紙ニ「此祓本兼見様御筆歟」トアリ」［宮地直一、一九三四、三七頁］とみえる。宮地直一コレクション所蔵の影写本には、『平仮名本　中臣祓』に「二重包紙、内包ニ中臣祓、外包ニ「兼右卿御筆【平仮名　中臣祓】」ト張紙ス」、『訓点付　中臣祓』に「白紙ニテ二重ニ包ム、外包ニ「此祓本　兼見様御筆歟」トアリ」と朱書きされている。『註釈大成』の解題においても「後に奉書の包紙を以て蓋ひ、その表は「兼右卿御筆【平仮名　中臣祓】」の張紙がある。」［『註釈大成』上、『中臣祓　平仮名本』、宮地、一五頁］、「外包紙に「此祓本　兼見様御筆歟」とある。」［『註釈大成』上、『中臣祓　仮名付本』、宮地、一六頁］とあって『三国最上之祓の研究』に挙げられた二本が、『註釈大成』に収録され、宮地直一コレクションに影写本が所蔵されるものであることを裏付ける。なお、両書の書写時期は『註釈大成』の編纂時期と重なり、『註釈大成』の底本とする為に影写されたとも推測される。なお、一校（昭和九年）と再校（昭和十四年）の間の昭和十一年七月より、西田長男が宮地の紹介で鈴鹿家文庫の調査を行ない、次いで吉田家文庫の調査を行なっているが［西田長男、一九七九、七頁］、これとの関係はわからない。この他にも宮地直一コレクションのうちには吉田家文庫や鈴鹿家文庫の調査の際に影写したと思われる資料が多数残されており、これらについては吉田叢書の編纂等とからめつつ別稿で述べることとしたい。

（4）『大宮司聞書』

本書は、「展示」の段階では確認されていなかったために、展示していない。内題は「大宮司大中臣伊長同常長両人之聞書」。聞き書きという性格から、内容の統一性に欠けるが、祓に関することを多く載せる。

底本は、先に示した『祓本　五種合本』所収の『大宮司聞書』で、神宮文庫所蔵本の影写本である。書写年を示す朱書きや書き入れなどはない。宮地直一コレクションには別に『大宮司大中臣伊長同常長両人之聞書』（受入仮・四七〇）が所蔵され、見返しに「松木素彦氏寄送本三部ノ一／昭和十四年一月十二日受取之」[14]とあって松木時彦の子の素彦から譲られたものであることがわかる。『註釈大成』に翻刻された『大宮司聞書』の末尾には「右大宮司聞書一冊、以文学博士宮地直一氏所蔵本為底本、以松木時彦氏所蔵本校合畢」［『大宮司聞書』、二〇〇頁］とあり、翻刻にも「（以松木氏本補）」として『大宮司大中臣伊長同常長両人之聞書』と一致する奥書が示されている［『大宮司聞書』、一九九頁］[15]。このことから、宮地直一コレクションに残された『大宮司大中臣伊長同常長両人之聞書』は、『註釈大成』編纂の際に対校本として用いられた「松木時彦所蔵本」であると考えられる。

『祓本　五種合本』所収の『大宮司聞書』には、目立った朱書きはないが、

梵字「ウン・ウン」に対して「ヲン」と振り仮名がふられているものに、張り紙をして「(ウン)(ウン)ガ正シ。」と訂正するなどし、翻刻では「ウンウン」としてある［『大宮司聞書』、一七七頁一行目］。このような梵字の振り仮名の誤りに対する訂正は他にもみえる。

次に『祓本　五種合本』に収録される他の祓本の親本所蔵者についてふれておくと、『元長記』（神宮文庫・第一門六〇五七号）、『御秡修法式』（同・第一門三八一四号）、『内外宮本式祓覚書』（同・第一門六〇五一号）、『外宮神宮流秡勤仕次第聞書』（同・第一門三八一六号）のすべてが昭和十三年三月に神宮文庫本を書写したものである。書写者については、明らかではない。

これまで、『祓本　五種』『同　六種』所収本についてふれてきたが、これらは昭和十年から十三年にかけて集中的に書写されている。この時期は『註釈大成』編纂時期と関わることで注目される。

今ひとつ注目されるのが、同時期に宮地直一所蔵本を書写したもの、あるいは宮地直一旧蔵本が神宮文庫に所蔵されることである（『神祇秘鈔・神皇系図・神皇実録』、神宮文庫・第一門八一〇六号、昭和十一年写。『神竪』、神宮文庫・第一門九三五〇号）。両書のうち、『神祇秘鈔・神皇系図・神皇実録』は宮地直一コレクションのうちに親本（受入仮・五七三）が確認されている。[16]『神竪』は宮地直一の旧蔵本である。宮地直一所蔵本の写本や旧蔵本が神宮文庫に所蔵されることについては今後、今回報告した資料を含めた宮地直一コレクションに所蔵される神宮文庫本の書写本及びその書写日、伊勢の神宮や神宮文庫をめぐる人々との交流を含めて調査が必要であると考える。

小括

以上、『註釈大成』の底本が宮地直一コレクションに所蔵されていることを紹介した。その中で、宮地が『註釈大成』の編纂に際して用いた資料で、『中臣祓　清世本』は宮地の所蔵本であったが、その他は神宮文庫、鈴鹿太郎、猪熊信男所蔵本の影写本であったこと、神宮文庫及び鈴鹿太郎所蔵本の影写は、『註釈大成』編纂期間中になされていること、神宮文庫所蔵の祓に関わる文献が、『註釈大成』に採録される以外にも昭和十年から十三年の間に書写されていることが明らかになった。無論、これらが『註釈大成』編纂の為のみに書写されているとは断定しがたいが、全く無関係であるということもできまい。また、宮地と底本所蔵者との学問的交流も注目されるところである。

まとめ

中臣祓は、神道史上において重要な位置を占めるものであり、古代から近世に至るまで、様々な儀礼や解釈が行われた。『大祓詞註釈大成』は、本学の研究・教育に深く関与した宮地直一、河野省三、山本信哉によって編纂され、底本には、編纂者の所蔵する本も多く用いられた。

『註釈大成』の編纂は、金光教の要職をつとめた佐藤範雄の喜寿を記念するものであり、佐藤と懇意であった山本を中心に編纂が進められたと考えられる。また出版に際しては金光教内で、佐藤範雄先生喜寿記念刊行助成会が設立された。

『註釈大成』の底本として用いられたもののうち、宮地直一のものは、現在國學院大學に宮地直一コレクションとして所蔵され、整理・分析が進められている。この中で、『中臣祓　清世本』、『中臣祓　雅業王伝授本』、『中臣祓　平仮名本』、『中臣祓　仮名付本』、『大宮司聞書』の底本が確認された。これらは宮地が所蔵していたものもあるが、猪熊信男、鈴鹿太郎、神宮文庫が所蔵するものの影写本もあり、影写されたのが『註釈大成』の編纂時期と重なるものが含まれる点が注目された。

このように『註釈大成』の編纂には様々な人々が関わり、近代人文学史及び国学史、教派神道史などとも関連し、これらの結節点のような様相を呈している。本稿には、筆者の理解・準備不足から誤りもあろうかと思う。今後、

註

(1) 宮地直一コレクションは、宮地直一のご遺族より寄贈・受け入れ時の状況については、田中秀典・根本祐樹「附　宮地直一博士資料調査記録」[田中秀典・根本祐樹、二〇〇五]、根本祐樹「整理作業報告―宮地直一資料編―」[根本祐樹、二〇〇五]を参照。

同コレクションについて「宮地資料」「宮地直一資料」の呼称が用いられることがあるが、本稿では「宮地直一コレクション」に統一し、「展示」の際のパネル等の文章を示す場合も、「宮地直一コレクション」に改めた。

なお、「宮地直一コレクション」には原稿類・蔵書（和装本・洋装本）・写真・天神人形などが含まれるが、本稿においては和装本を指すものとする。

(2) ここで言う神道史は、〝神道思想史〟ではなく、現在いうところの神道史を指す。

(3) 主として、宮地直一コレクションの調査にあたっている遠藤潤・戸浪裕之・大東敬明が担当した。

「展示」は、左に記した資料のうち、毎週八点程度展示した。

展示品について、宮地直一コレクション所蔵本については、受入時に付された番号を（宮地直一コレクション　受入仮・番号）の形で示し、河野博士記念室所蔵本については、『河野省三記念文庫目録』（錦正社、一九九三）に基づいて（河野博士記念室　河野・通し番号）という体裁で「通し番号」を記した。

●『中臣祓注抄』複製本見本（宮地直一コレクション　受入仮・一二一九）「中臣祓住（注）抄」、複製（昭和）一冊。

●「中臣祓」（宮地直一コレクション　受入仮・一一八九①）写本（近世）、一冊。

●「祓本」（宮地直一コレクション　受入仮・一一八九②）写本（近世末）、一冊。

●『平仮名本　中臣祓』（宮地直一コレクション　受入仮・一二七〇）写本（昭和）、一冊

●『三国最上之祓』（複製）家蔵本（宮地直一コレクション　受入仮・一二七四）複製（昭和）一冊。

●『訓点付　中臣祓』（宮地直一コレクション　受入仮・一二七八）写本（昭和）、一冊。

●『中臣祓訓解』（河野博士記念室　河野・一〇二二）版本（近世）、一冊。

●度会延佳『追考中臣祓瑞穂鈔』（河野博士記念室　河野・一〇三二）版本、寛文六年刊、二冊。

●吉川惟足『中臣祓仮名抄』（河野博士記念室　河野・一〇三九）写本（近世）、一冊。

●岡熊臣『大祓詞塩之八百会』（河野博士記念室　河野・一一五六）写本、元治元年写、三冊。

(4) 展示パネルの執筆にあたっては、宮地直一『三國最上之祓の研究』[宮地直一、一九三四]、西田長男「中臣祓　中臣祓抄　解題」[西田長男、一九七七]、岡田荘司「解題」・「中臣祓信仰について」[岡田荘司、一九八五・一九八九]等を参照した。

(5) 以下、伊勢流。

(6) 以下、吉田流。

(7) 未見。『信仰回顧』に引用されたものに依拠する[『信仰回顧』下、二五四～二五五頁]

(8) 発起人の名を左に掲げる。

和泉乙三	池川朋唯	畑一	濱田幾治郎	長谷川雄次郎
西村傳藏	土肥仁作	片島幸吉	片岡次郎（会計）	神田兼太郎
吉永甚太郎	高橋正雄（会計）	中野辰之助	山下鏡影	山本豊
小林鎮	安部太	佐藤幹二	佐藤吉夫	宮本嘉一郎
白神新一郎	關口釣一			

※昭和八年二月八日に『大祓詞註釈大成』委員会に出席している場合は、傍線を付した。

(9) 『註釈大成』下「例言」には「中臣祓考索は宮地直一所蔵本」とあるが、『中臣祓考索』の末尾に「右中臣祓考索一冊、以河野省三本為底本、以宮地直一所蔵本校合之畢。」[『中臣祓考索』、二七頁]とあり、また親本に『註釈大成』に直接関わるような朱書きはみえないので詳細についてはふれない。河野博士記念室には河野・一〇二九、宮地直一コレクションには受入仮・一二一二に所蔵される。

(10) 底本の題箋には、「宮」は書かれていないが、内題によって「宮」を補う。

(11) 以下、影写本に神宮文庫の図書番号が記されているものには、『神宮文庫蔵　和書総目録』（戎光祥出版、一九九五）で確認のうえ、（　）のうちに記した。

(12) ただし、『祓本　六種合本』には、『大中臣祓』は「度会郡宮本村」の人物が奉納したとあって奉納者の住所が異なっている。

(13) 『三国最上之祓』に関連する論文として『三国最上之祓の研究』のほか、西田長男「吉田家に於ける神書開版と慶長勅版中臣祓」[西田長男、一九四三]や同「神書の古版本二―三」[西田長男、一九六七]がある。

(14) 『中臣祓私説』（受入仮・一二〇〇）の見返しには「拝呈　松木素彦」という貼り紙があり、「松木素彦氏寄送本三部ノ一／昭和十四年一月十二日受取之」、『中臣祓加直鈔　中臣祓領評註』（受入仮・四九〇）には「松木素彦氏寄送本三部ノ一／昭和十四年一月十二日受取之」と朱書きされている。

(15) 『註釈大成』「大宮司聞書」

右宮司聞書者、以荒木田盛清手書之本、中西信慶所写也。以彼再伝之本、使人謄寫。

久志本
度會常昭

享保十五年庚戌初秋日、借久志本常彰【本名常昭】所蔵之本、使人傭書校合了。

禰宜度會神主智彦
［『大宮司聞書』、一九九～二〇〇頁］
宮地直一コレクション『大宮司大中臣伊長同常長両人之聞書』
右宮司聞書者、以荒木田盛清手書之本、中西信／慶所写也以彼再伝之本使人
謄写
久志本
度會常昭
享保十五年庚戌初秋日借久志本常彰【本名常昭】所蔵之／本使人傭書校合了
禰宜度會神主智彦

(16) 神宮文庫所蔵の親本には「ウン・ウン」とあり、影写時の誤写である。

〈参考文献〉

・『諸祓集』、『中臣祓　雅業王伝授本』、『中臣祓　賢圓本』、『中臣祓　平仮名本』、『中臣祓　假名付本』、『大宮司聞書』、（『大祓詞註釈大成』上、名著出版、一九八一（内外書籍、一九四一）所収）
・『大祓詞天津菅麻』（『大祓詞註釈大成』中、名著出版、一九八一（内外書籍、一九三八）所収）
・『中臣祓考索』（『大祓詞註釈大成』下、名著出版、一九八一（内外書籍、一九三五）所収）
※『大祓詞註釈大成』に付された解題と佐藤範雄の「跋文」については、［『註釈大成』巻、「書名（跋文）」、執筆者姓、頁］の順に示した。
・『國學院雑誌』三三巻三号、國學院大學、一九二七。
・『皇国』三一九号、皇国発行所、一九二七。
・神宮古典籍影印叢刊・三『神宮儀式　中臣祓』、皇學館大學、一九八三。
・『信仰回顧六十五年』上・下、佐藤範雄、一九七〇・一九七一、信仰回顧六十五年刊行会。
・『中臣祓注抄』、神宮司庁、一九三三。
・遠藤潤　一九九六　「宮地直一年譜」（島園進・磯前順一編『東京帝国大学神道研究室旧蔵書　目録および解説』東京堂出版）。
・岡田莊司　一九八一　「覆刻版解説」（『大祓詞註釈大成』下、名著出版）。
・岡田莊司　一九八五　「解題」（『神道大系　古典註釈編中臣祓註釈』神道大系編纂会）。
・岡田莊司　一九八九　「中臣祓信仰について」（『神道古典研究』会報一〇号、神道古典研究会）。
・國學院大學神道史学会編　一九八〇「宮地直一博士主要著書・論文一覧」（『宮地直一博士三十年祭記念論文集　神道史の研究』叢文社　所収）。
・田中秀典・根本祐樹　二〇〇五　「附　宮地直一博士資料調査記録」（『宮地直一博士写真資料目録』國學院大學日本文化研究所）。
・西田長男　一九四三（初出・一九三八）「慶長勅版中臣祓と吉田家に於ける神書開版」（『神道史の研究』雄山閣）。
・西田長男　一九六七　「神書の古版本二―三」（『神道宗教』四六、神道宗教学会）。
・西田長男　一九七七　「中臣祓　中臣祓抄　解題」（『吉田叢書　第四編　中臣祓・中臣祓抄』叢文社）。
・西田長男　一九七九　「第五巻　中世編（下）のために」（『日本神道史研究』第五巻　講談社）。
・根本祐樹　二〇〇五　「整理作業報告―宮地直一資料編―」（國學院大學学術フロンティア事業　研究報告『人文科学と画像資料研究』二　國學院大學日本文化研究所）。
・宮地直一　一九三三　「中臣祓注抄解説」（『中臣祓住抄』〈複製本〉付録、神宮司廳）。
・宮地直一　一九三四　『三國最上之祓の研究』（『三国最上祓』〈複製本〉付録、明治書院）。

※引用に際して、私に字体を改め、読点を付した部分がある。割書は【　】で示した。

【付記】
本稿脱稿後、神宮文庫において、宮地直一コレクション所蔵影写本の親本を調査する機会を得た。しかし、脱稿後であったので、明らかな事実誤認を修正するにとどめ、加筆は行なわなかった。調査に際して、神宮文庫の皆様に様々なご配慮をいただいた。記して御礼申し上げる。